

▶▶▶ 中山間地域における新商品開発

地域資源を活用した クラフトビール開発に向けた基礎調査

▶ プロジェクトメンバー

○岸上 光克（食農総合研究教育センター）
八島 雄士（観光学部）

▶ 共創相手

那智勝浦町色川地域（小阪区）

○はプロジェクト代表

プロジェクトの背景

承知のように中山間地域は危機的状況にある。このような状況のもと、内発的な地域づくりを基本とした農業振興や観光振興など様々な取り組みがみられる。また、近年では、これらの取り組みに大学生（教員含む）が参画する事例も多数みられる。

観光学部では、地域インターンシップを実施しており、2016年度から那智勝浦町色川地区での活動を行っている。そのなかで、色川地区ならではの行事や風習への参加（フィールドスタディ）を通し、学生の知見を深めることを中心に活動を行ってきた。近年では、これまでの活動をベースとしつつ、棚田保全など地域の課題解決に向けた具体的なアクションを模索していた。そこで、「色川の水でビールを作ってみればどんな味だろう？」という素朴な興味から、新商品開発を検討してみる価値があるのではないかと考え、プロジェクトが開始された。

プロジェクトの目的

本プロジェクトにおいては、地域と学生が「新商品開発とは何か？」からスタートし、新商品開発までのプロセスを学ぶとともに、試作品を完成させることを目的とした。対象地域は、那智勝浦町色川地区であり、同地区は那智勝浦町の中心部から山間部へ車で30分ほ

ど走った所に位置し、9つの区から成る人口300人ほどの地域である。かつて盛況していた鉱業が1970年代に廃止となり、地域の人口は外部へと流出した。しかし、時期より外部からの移住者を積極的に受け入れ、現在では地区全体の人口のおよそ半分を移住者が占めるまでになっている。地域資源として、美しい棚田や茶畑が有名である。また、今回の新商品は「クラフトビール」として、プロジェクトを進めることとした。さらに、プロジェクトには、地域住民や地域インターンシップ参加学生にとどまらず、卒業生や地域外の協力者も参画している。

プロジェクトの活動内容および成果

①論文や既存資料による勉強会の開催

地域資源を活かした商品開発とは何か？について、各種文献や資料を用いて、勉強会を実施した。クラフトビールと地ビールとの相違や商品開発の意義などを文献で把握するとともに、酒税法については、税務署へ問い合わせるなどの取り組みを行った。また、全国の様々な取り組み事例について、情報収集し、その特徴についてまとめた。

②クラフトビールの醸造工程等のヒアリング

前述したが、今回の商品開発については、「クラフトビール」としたが、税務署へのヒアリングなどから具体的な商品開発による経済活動への展開は困難である



ブリュワリーでのヒアリング

と判断した。しかし、新商品開発のプロセスをまとめ、地域が主体となった取り組みにつなげることは可能であると考えた。そこで、県内においてクラフトビール醸造のプロセスを見学できるブリュワリーで、完成までのプロセスについて学んだ。簡単なヒアリングを行った後、具体的な地域資源を用いた試作品の醸造体験(ワークショップ)を行った。

③クラフトビール製造に向けたコスト計算や広報活動の検討

クラフトビール製造に向けた原価計算や取り組み組織の体制、広報活動について検討を行った。県内ブリュワリーにおけるOEMの費用試算、原材料費や人件費、ラベル経費などについて試算を行った。

④地域資源を活かした試作品「ほうじ茶エール」のアンケート調査

地域資源である「ほうじ茶」を活用した試作品のアンケート調査を実施した(ブリュワリーに委託)。試作品であることや回答者が関係者であることから、正確な意見聴取とは言い難いが、今後の参考となることは間違いない。アンケート結果を簡単に紹介すると、回答数は85人、性別をみると、「男性」が73%、「女性」が27%となっている。年齢は、「40歳代」が32%と最も多く、次いで「30歳代」と「50歳代」が21%となっている。色川地区との関わりをみると、「複数回(色川を)訪れたことがある」が59%と最も多くなっている。色川地区の印象は、「自然が豊か」(29%)、「人が良い」(18%)、「活発な地域」(17%)などの意見が多かった。

⑤検討結果の情報共有

これまでの取り組みをオンラインで地域住民と情報共有を行った。地域住民からは、「販売などの経済活動を



試作品と広報誌(案)



SNSでの広報活動

することは現状では困難であるが、趣味程度で試作品を作り、地域で楽しむことは可能である」との意見があり、今年度の成果を活用した取り組みを進めている。

現在、色川の特産品を風味付けしたオリジナルクラフトビールの試みに応援してくれる「割り勘仲間(会員)」を募集し、地域主体で試作品の製造を続けている。将来的には、この取り組みが事業化されることとともに、クラフトビールを求めて色川に足を運ぶ人が1人でも増えることを期待している。

さらに、現在では、観光学部の地域インターンシップ参加(現役)学生や卒業生とともに、地域外の人々も参画し、ボランティアでこの取り組みを支援する体制が構築されつつある。また、SNSでのプロジェクト広報や試作品を活用したオンライン交流会なども開催されており、今後の取り組みが期待される。

